

琉球大学学術リポジトリ

沖縄における野菜の消費構造について II(家政学科)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2008-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 友利, 知子, Tomori, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/4570

沖縄における野菜の消費構造について II

友 利 知 子*

Tomoko TOMORI: Consumption mechanism of
vegetable in Okinawa. (II)

I はじめに

先に、沖縄における勤労者世帯（3名～8名家族，583世帯）1世帯1日当りの野菜支出をみた。その結果，4月に11.5 ϕ ，11月に14.0 ϕ でそれぞれ884 g と793 g の野菜を購入，これを1人1日になおすと，4月に2.2 ϕ 支出して163 g ，11月に2.7 ϕ 支出して148 g の野菜を購入していることになる。

この野菜支出に及ぼす収入ならびに家族人員数要因の影響をみると，4月には野菜支出（F）＝ $1.590 + 0.055I - 0.433N$ ，11月は $F = 1.446 + 0.004I + 0.389N$ ，と収入要因による影響は4月に大きく¹⁾，一方家族人員数要因による影響は11月に大きかった。

この野菜支出に関して，収入の増加に伴って増加する²⁾とか，ほぼ一定である³⁾とか，増加するが余り顕著ではない⁴⁾とか，または家族人数の点からも収入階級別の点からも殆んど変化しない⁵⁾とか云われているが，筆者の結果からみると，沖縄における野菜支出は，収入の増加に伴って増加するが余り顕著ではなく，家族人員数要因の方が野菜支出に及ぼす影響が大きいと云える。この家族人員数要因について，収入要因と家族人員数要因が同時に働いているとみて，沖縄の野菜支出傾向をみると，11月にはそれが（+）に左右するが，4月には（-）に左右しているのである。

つまり，家族人員数がふえると野菜支出は減るということになる。しかし，家族人員がふえると，一人当りの野菜支出は減っても一世帯当りの野菜支出が減るとは思われないから，そこには別の考察が必要ではないかと思う。つまり，野菜の中には支出のふえるものも，あるいは減るものもあるのではないかと考えられるので今回はこの点について考察を試みた。

II 資料ならびに分析の方法

資料は前回のもの⁶⁾を用い，先に野菜全体について収入ならびに家族人員数要因による野菜の支出傾向をみたのを今回は更に野菜を価格差別に4グループ⁷⁾に分け各グループにおける野菜の支出傾向を，特に4月の家族人員数要因による影響について回帰線のあてはめによる傾向的変動と弾力性概念の面から考察した。

III 結果ならびに考察

1) 収入要因による価格差別野菜の支出傾向。

第1表より，4月に収入が\$10.00増すと，なかでもCグループに属する野菜支出が\$0.08と大きく

* 琉球大学農学部家政学科

第1表 価格差によるグループ別野菜支出にあてはめた回帰線の特性値

野菜の価格差による区分	調査時期		1965年4月		1965年11月	
	載片	限 界 性 向	載片	限 界 性 向	収入要因	家族人員数要因
A グループ	1.347	0.005	0.239	0.217	0.025	0.139
B グループ	-1.752	0.056	-0.313	3.557	-0.018	0.854
C グループ	-2.988	0.077	-0.715	0.702	0.005	0.263
D グループ	-0.592	0.025	-0.360	0.627	-0.0005	0.067

増え、次いでB、Dグループの野菜支出も約\$0.06, 0.03と増えるのに反しAグループの野菜支出は約\$0.01と余り増えない。このことは先の報告でも述べたが、4月のように野菜が豊富に出回って、しかも安い時期には、収入が増えると野菜の自由、選択的な購入がなされている事を意味する。それが11月になると4月とは逆にまずAグループに属する安い野菜の支出が\$0.03増え、次いでCグループに属する野菜が約\$0.02増えるがB、Dグループの野菜の支出は減って来る。この点について、11月の野菜価格が一般に高い時に、価格という点だけからみると、Aグループの野菜支出の次にBグループの野菜支出が増えるのではないかと思ったがBグループよりCグループの野菜支出が大きいというのは、野菜の購入が価格要因だけによってなされるのではなく、或特定の野菜を購入しようとする食習慣的な要因がそこに左右して来るとみていゝと思う。

これを弾力性概念でみると(第2表)4月には、一般の人々は収入が増えるとDグループに属する最

第2表 グループ別野菜支出の弾力性値

野菜の価格差による区分	調査時期		1965年4月		1965年11月	
	弾力性	収入弾力性	家族人員弾力性	収入弾力性	家族人員弾力性	
						収入弾力性
A グループ	0.247	0.368	3.191	0.176		
B グループ	-2.163	-0.408	-0.273	0.736		
C グループ	-1.50	-1.109	0.295	0.496		
D グループ	1.346	2.244	0.9486	0.339		

注) 1965年4月は平均収入\$123.40, 平均世帯人員4.79人; 11月は平均収入\$116.04, 平均世帯人員4.8人における弾力性値である。

も高いはしりの野菜を購入しようとするのに反し、11月には4月とは逆にAグループに属する安い野菜を主に購入しようとし、また4月と11月の各グループの弾力性値を比較し、その差から4月には11月よりDやBグループの野菜をより多く購入しようとするし、一方11月には4月の場合よりAやCグループの野菜をより多く購入しようという傾向がみられる。このように4月と11月の野菜購入に対する傾向は全く異ったものである。

2) 家族人員数要因による価格差別野菜の支出傾向。

同じく第1表より家族人員数要因による価格差別野菜の支出傾向をみると、11月の場合、家族人員が1人増えるとBグループに属する野菜支出が0.85の割で増え、次いでC、A、Dグループといずれの支出

も増えて来るのに反し、4月には家族人員が1人増えるとAグループに属する安い野菜だけが約\$0.24の割で増えて、あとのB、D、Cグループに属する野菜支出は減って来る。つまり、家族人員が増えると4月にはAグループに属する野菜の購入が重点的となるのに対し、11月にはAグループよりもその他のグループ、ことにBやCに属する野菜の購入が重点的になって来る。この、4月に重点的に購入されている野菜と、一方11月に重点的に購入されている野菜が同じく、ダイコン、カラシナ、キャベツ、ニンジン、チシャであることから、こゝにも野菜支出に影響する要因が家族人員数要因だけでは説明されない食習慣的要因が大きく左右しているものと思われる。またこれらの野菜が沖縄における大衆的な野菜といえるのではないだろうか。

これを弾力性概念でみると(第2表)家族人員数が増えると、4月には主にAグループに属する野菜を購入しようとして、BやCグループに属する高価な野菜を減らそうとするのに、11月には、4月とは逆にAグループに属する野菜は余り購入しようとせず主にBグループに属する野菜を購入しようとするということが解った。

IV ま と め

食生活の内容を決定する要因は何といっても所得で、その外に供給条件の変化や食習慣や嗜好も無視出来ない。なかでも供給条件の変化は大きく作用すると云われている。

筆者はこれまで沖縄における野菜の消費構造、つまり野菜支出における収入ならびに家族人員数要因による影響について2回に亘り考察して来た。つまり沖縄における野菜支出は、収入要因によってある程度増えるが余り顕著ではなく、また4月と11月という供給条件が全く異なる場合にも収入要因は野菜支出にたいした影響を来さない。しかし一方家族人員数要因の方は明かに大きく影響を及ぼし、供給条件の悪い11月には家族人員数が増えると野菜支出は全般に増えるが、供給条件のいい4月には家族人員数が増えると野菜支出は全般には増えず、野菜の中でも沢山出回って、しかも安いグループに属する野菜支出だけが増えてその他の野菜支出は増えない。つまり、食習慣的要因が働いて野菜の購入が決って来るものと思われる。その点を次の研究で具体的にしたいと思う。

稿を終るにあたり大阪市立大学家政学部生活経済研究室多田吉三先生に御教示をいただきましたことをこゝに厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 友利知子 1967 沖縄における野菜の消費構造について(1), 琉球大学農学部学術報告14:175~182。
- 2) 深田貞子 1962 家族経済における飲食費構造の分析, 第4報, 岡山大学教育学部研究集録13:69~79。
- 3) 深田貞子 1959 家族経済における飲食費構造の分析第2報, 岡山大学教育学部研究集録8:38~45。
- 4) 深田貞子 1961 家族経済における飲食費構造の分析, 第3報, 岡山大学教育学部研究集録11:11~16。
- 5) 深田貞子 1961 家族経済における飲食費構造の分析第3報, 岡山大学教育学部研究集録11:11~19。
- 6) 友利知子 1967 沖縄における野菜の消費構造について(1), 琉球大学農学部学術報告14:176~182。
- 7) 友利知子 1966 沖縄における野菜の出回り時期と価格について。琉球大学農家政工学部学術報告13:127~140。
- 8) 木村靖二 1965 食糧経済学—消費, 生産, 流通, 格の分析—。98。

Summary

- 1) In the last analysis, the income factor will determine the final quality of the people's dietary life while due consideration should be given to the effect of such other factors as the different movements of supply, the people's individual eating habits, and their individual preferences. The effect of the supply movement factor is said to be especially far-reaching.

On two different occasions, the author has closely examined the effect of vegetables consumption, that is, the co-effect of the income factor and the family size factor on vegetables expenditure. This examination leads to the conclusion: In Okinawa, the income factor has some, but hardly noticeable, effect on the increase of vegetables expenditure. Such effect is also slight even during the month of April when there is the amplest supply of vegetables and during the month of November when there is the shortest supply of vegetables.

On the other hand, the family size factor apparently has a considerable effect on the increase of vegetable expenditure. In November, vegetable expenditure on the whole increases as family size increases: the increase in expenditure occurs only with vegetables which are moving most amply at lower prices.

These facts seem to present some unique aspects of the Okinawan people's eating habits and preferences, which I will cover in my next report.

- 2) Moreover, it is understood in the last analysis that the family size factor has a considerable effect on the vegetable expenditure. Ultimately, this indicates that the people's dietary custom factor tending to buy some specific vegetables among the vegetables is simultaneously possible to work on the vegetable expenditure.